



マリア観音

母

母の話をしようとすると、声を上げて泣きたくなる。実は私と母のあいだには深い感情的なつながりがあるわけではない。私たちがいっしょに寄り添っていたのは五年間だけだったからだ。おそらくは性格なのだろう、私は今でも母を愛し母を恋しく思い、母は私の心の中の重要な位置を占めている。

母の顔と声をはっきり覚えてはいないが、母方と父方の祖母から聞かされて、母が聡明で美しくて上品で、才能ある女性だったということを知っている。このことは写真を見てもわかる。母はとても優美な女性で、だから私はさらに母のことが好きで懐かしがっているのだ。

母は女性のたしなみとして求められていた刺繍をすることが上手だっただけでなく、詩を詠むことも絵を描くこともでき、読書人（科挙の試験を受けて官僚になった者）の家の子弟の名に恥じない女性だったそうだ。しかし若いころから病弱だったのでいつも沈んでいた。それは、母が生活を愛し、自分の母親と娘を心から愛していたからだ。しかし恨むべきは無情の天か。母はわずか二十六歳で命を奪われこの世から離れ、私から離れて行ってしまった！

私はこうして母を失った。ほかの母親たちが自分の子供を可愛がっているのを見たし、子供たちが母親にぴったりとくっついているのも見た。母親たちは優しくて慈愛に満ちている

のを見たし、子供たちは幸せそうに威張っているのも見た。ところが私はひとりきりで孤独のままだ。ああ、どうして母を想わずにいられよう、どうして私が母を必要としないことがあるだろう！

私はいつでもどこにいても、母娘のようすを注意深く観察した。至るところで母性愛の偉大さを発見した。小説、映画、芝居はすべて偉大な母性愛の物語を描いていた。しかし私には母がない。母性愛を享受することができない。母性愛は作り出すこともできず、ほかのものが代わりとなることもできない。私にできるのはただ母性愛を羨み慕い、母である女性を尊敬することだけだった。

ある日の夜、空にはぼたん雪が舞っていた。道路には厚い氷が張っていた。寒気を追い払うためと憂うつな気分を晴らすため、酒を一瓶買ってゆっくりと住まいに向かって歩いていた。突然、子供の泣き声が聞こえてきた。

「母ちゃん、お腹が空いたよ、お腹が空いたよ、母ちゃん！」

急いで泣き声のしたほうを見ると、三、四歳ぐらいの子供を抱いた母親が菓子屋の店の端のほうで物乞いをしているのが目に入った。近寄っていくとその母親は少し恥ずかしそうにしながら私のほうに手を伸ばした。

「どうかお恵みを、哀れなこの子は一日じゅうお腹を空かせているんです。」

私はためらわずにポケットから二百文の銅貨二枚を取り出して母親に渡した。彼女は何度もお礼を言いながら金を受け取ると、すぐに店に入ってパンを二個買って子供に食べさせ、自分は食べなかった。

「あなたは どうして食べないんですか？」と聞いた。

「子供が腹いっぱいになったら食べますよ。」母親は落ち着いて答えた。

かたわらに立って彼らを見ていると、その子は二口か三口でパンを一個食べてしまい、母親は持っていたパンを半分子供に分けてやった。

「これで食べられますね！」と私は気になって言った。

母親はうなずいた。そして彼女がパンを食べようとしたとき、子供はもらった半分を食べ終わっていた。子供が本当に空腹だったことが見てとれた。母親も空腹であることが子供には理解できるはずもない。

「母ちゃん。もっと食べたいよ！」子供は小さい手で母親の半分のパンを奪い取った。母親はパンを子供に食べさせるしかなかった。私は気分を害して少し怒ったように言った。「お腹が空いていないわけじゃないんでしょう？ どうしてみんな子供にやるんですか？」

「子供が欲しがっているからですよ！」母親は苦笑いした。目の中で涙が光っていた。

母親の涙の光が私の心の奥を突き刺し、私は母性愛の温もりを感じた。突然全身が熱くなった！ これこそ偉大な母性愛の力で、これこそが世界のいかなる愛とも比べることができないものなのだ！

そこで、私はその母親に尊敬の念を抱かずにはいられなくなり、またポケットにあったありったけの二百文を渡し、「私の母親になってくれませんか？」と言おうとした。ところが私が口を開く前に、彼女は金を受け取ると「ありがとうございます」と言いながら子供を抱いて去っていった。

私は彼女がまたパンを買いに行くのだろうと思っていたが、彼女はあっという間にいなくなった。吹雪に向かって彼女の姿を追ったが影も形も見えなかった。まるで吹雪が私に叫びながら教えているようだった。

「何をぼんやりしているのだ！ 彼女はお前の母親ではない。お前は母の無い子なのだ！」

そうなのだ、私には母がいないのだ。この世にいる母親はみんな私の母親ではないのだ。それでは私の母はいったいどこにいるのだ？ 私の心は寒さに震え、憂うつな気持ちのまま家に帰り、明かりをつけて酒を二杯飲み、ベッドの上に仰向けになって天井を見ながら物思いにふけた。さっきみた情景が、子供のころの似たような状況をぼんやりと思い出させ、私ははるか昔の追憶の中に深く沈んでいった。

十七年ほど前、私が四歳のとき、母は湖北省の叔父の所に私を連れて行っていった。私は目の病気を患っていたので一日中泣きやまずにいた。かわいそうに、母は食事も寝るのも忘れて私をずっと抱いていた。このことはあとになって他の人が話して聞かせてくれたことだが(従姉だったような気がする)、私の脳裏には、ぼんやりとではあるが忘れることのできない情景として残っている。

特に深く記憶していることがある。夜に母と叔父、叔母がマージャンをしている。私はすでに眠っているのだが母親はずっと私を抱いていて、いつも私はうるさい音に目が覚め、しかし電灯がまぶしくて目を開けられないので泣きはじめると、母がすぐに歌を歌ってくれるのだ。

母も、私の母も、さっき道で出会った母親と違うところがあるはずがない。自分のことは顧みずに子供をひたすらに愛し、護る母親。悲しむべきことは、私の母は私を一人前に育て上げないうちに行ってしまったということだ。永遠に行ってしまった、茫洋とした果てしない所に！ 絶望の悲しみが私を押しつぶした。枕に顔をうずめ声を上げて激しく泣いているうちに、私はいつのまにか寝入ってしまった。

多分、神が私に心を動かされたので、私をすばらしい夢の世界につれて行ってくれたのかもしれない。私は初めて母の夢を、若くて美しい母の夢を見た！

古都信陽にある実家のような。私は机の前で本を読んでいる。窓の外から秋風が吹いてきて全身に寒気を感じ、私は机にうつぶせになって休憩をとった。もうろうとしていたとき、突然私の肩をだれかが軽くたたき、優しく言った。

「風邪を引くわよ、ほら、ベッドに行ってお休みなさい！」

びっくりして頭を上げてあたりを見回すと、見覚えのある若い女の人が目の前に立っていた。美しく物静かで優雅な物腰だった。中華民国時代初期の服装で、シンプルで上品なシルクの長いスカートをはいていた。彼女は優しく私の髪をなで、私の手をとってじっと見つめていた。

「娘や、お母さんが帰って来たのよ！」

「お母さん、私のお母さんなの?!」 私は驚いて目を見開き、彼女をよくよく見た。

母が微笑してうなずくと私はすぐさま母の胸に飛びこんでいき、喜びの熱い涙があふれ出た。

「お母さん、お母さん、帰って来たのね！ いったいどこへ行ってたの？ 私をこんなに苦しめて。お母さん！」まるで、また母を失うのではないかと恐れているように、しっかりと母に抱き着いた。母は泣いていた。その涙が私のうなじを濡らした。母は黙って座っていた。私は母の前にひざまずいた。

「お母さん、どうして答えてくれないの？ 泣いてるの！ お母さん、お母さん！」私も泣いた。

母はうつむいて黙ってすすり泣き、ひたすら私の頭をなでていた。言いたいことは山ほどあるがどこから話せばいいかわからない、言いたいけれど言えないことがある、というように、ただひたすら私の頭をなでているだけだった。しばらくしてやっとすすり泣きながら言った。

「もう聞かないでちょうだい。私のことは忘れなさい。ごめんなさいね。でも、私にもどうしようもないことなの。ただ運命を恨むしかないの。治らない病気になると決まっていたの、私たち母と娘はいっしょにはいられないと決まっていたの。」

「だめ、だめ。絶対に忘れられない、お母さんが必要なの。もう離れないで！」私は少し甘えを帯びた口調で懇願しつづけた。

「だめなのよ。私たちは同じ世界の人間じゃないの！ いっしょにいることはできないの。」

母は頭を振りながら悲しそうに言った。「これは運命なのよ、運命。ちゃんと生きていってちょうだいね。私のために悲しまないで。自分のことを大事にして、上に向かって行けるように努力して、あなたの前途は無限なのよ。」

私は半信半疑で母の話を聞いていたが、言っていることがよくわからなかった。しかし私は母が再び行ってしまうことを見抜いたので、いっしょうけんめい哀願した。私はどんな運命も信じていない。私は運命が自分で手の中にあると思っていた。死に神が彼女を支配しているなどとは思ってもいなかった。私たちは互いにすすり泣いた。二人の涙がとけあい、しばらく話ができなかった。

突然遠い所からニワトリの声が聞こえてきた。母はびくっとしてすぐに立ち上がり、出て行こうとした。私は母の前身ごろをぐいっと引っ張って絶対に放さなかった。

「行っちゃだめ、お母さん、二度と私を捨てて行っちゃだめ！」私は足をしっかり踏ん張って悲痛な声で叫んだ。

「だめなのよ。行かなければならないの。お願い、放してちょうだい、遅くなってしまうわ！」

母はいっしょうけんめいに私に頼むように言った。

「残酷なことをしないで、お母さん！ 優しい母心はないの？」私は我慢できなくて母に恨み言を言い、スカートをもた強く引っ張った。

母はちょっとためらいを見せたあと、突然聞いてきた。

「私といっしょに行きい？」

私は即答した。「行きたい！」 私は心の中で考えた。母を引き止められないのなら一緒に行こう。どっちみち彼女無しではいられないのだから。この時、母は袖からハンカチを取り出し、私の目を覆ってから言った。

「目を閉じなさい。今からあなたをある場所に連れて行ってあげるから。でも、そこは一個の太陽もない、光もまったくないところなのよ」

「地獄にだって行く。お母さんがいてくれさえすればいい！」少しもためらわなかった。私は母の話がつくり話しだと思った。太陽がなくて光がないような世界がどこにあるというのだ。心の中でおかしくなって笑った。母はまだ私が三歳の子供だと思っている。

しかし、このとき私は目を覆われていたので、確かに目の前は真っ暗だった。私は眼を閉じるしかなく、母に手を引かれたまま歩いて出て行った。歩きつづけてどのくらい行ったかわからないが、足に力が入らなくなり、頭がふらふらしてきた。だが浮き浮きしていた。私はもう母親のない子ではなくなるのだと思い、この上ない幸福感に浸っていた！

どれくらいの時間がたったのだろうか、私は少しいらいらしてきた。一度「お母さん」と呼んだ。返事はなかった。私は目を開けた。なんと不思議な事だろう、ハンカチはなくなり母もいなくなっていて、目の前には一面、荒涼とした野原が広がっていた。私は茫然とした。まるで冷水を頭から浴び、鋭い矢が心臓に突き刺さったようだった！私は痛みのあまり地面に倒れこんだ。そしてまた起き上がると、あちこちを探して大声で呼んだ！ 静寂が空を覆い、黄砂が大地に満ちていた。私の目は涙でぼんやりとかすんでいた……

雄鶏が高らかに歌い、風が吹いてきて私はぶるっと震えた。急いで涙をふき家に帰ろうとしたとき、自分が野原ではなくてベッドにいるのがわかった。この時、窓の外は徐々に白みはじめていて机の上の灯火はすでに消えていた。私は頭を軽くたたき、自分が夢を見ていたのだとわかった。恐ろしくて悲しい荒唐無稽の夢をみたのだ！

荒唐無稽というが、実はそうではない。私は本当に母を失っていたので母を偲び、「いつか母が帰ってきたらいいのに」と、とりとめのない空想をしていたから、夢の中で母を見たのだ。しかし現実是非情で、夢さえも私を少しも幸せにはしてくれなかった。夢の中でも母を失うという苦痛を、私は再び味わったのだ。

夢は覚め、すべては元のままだった。私には依然として母はなく、依然として孤独だ……

一九三五年十二月二十四日



(中国語原文)

母 亲

提起母亲我就想哭！其实我和母亲的感情没有太深厚的基础，因为我们只相偎依了五年。大概是天性的原故，我爱她，怀念她，她在我心里占着重要的位置。

我记不清母亲的音容笑貌了，但是从外祖母，祖母她们的嘴里，我知道母亲是一个聪明、贤淑、风雅、富才情的女子；这在照片上也能看得出，她的形象十分优美，因此我更爱她，怀念她！

听说母亲除了长于女红刺绣以外，能诗会画，不愧是书香门第的女儿。但是她年轻时身体就不好，经常生病，为这她很忧郁；因为她热爱生活，爱她的母亲和我。可恨苍天无情，她才只有二十六岁的年龄，就被夺去了生命，从此离开了人间，离开了我！

于是我没有母亲了，我看见人家的母亲爱着自己的孩子，看见人家的孩子偎着自己的母亲；看见做母亲的是那么温柔，慈祥，看见做孩子的是那么骄傲，幸福；而我却是这般的孤独，凄凉，天呵！我怎能不想母亲，不需要母亲？！

在任何地方，任何时候，我都十分注意人家母女的情况，我处处发现母爱的伟大；从小说里，电影，戏剧里，也都有描写母爱伟大的故事。但是我没有母亲，享受不到母爱，母爱也无法创造和代替；我只有羡慕母爱，尊敬一切做母亲的人。

一天晚上，空中飘着鹅毛大雪，马路上冻结了厚厚的冰。我为了驱寒，也为了解愁，买了一瓶酒慢慢地踱回住处。忽然我听到一个孩子的哭声：

“妈妈，我饿了，我饿了，妈妈！”

我连忙向这哭声寻视，原来是一个母亲抱着一个三四岁的孩子，缩避在一家糖果店门的角落里乞讨。我走过去，那母亲带点羞涩地望着我伸手叫道：

“行行好吧，可怜我这孩子饿了一天啦！”

我毫不迟疑地从衣袋里取了两枚二百文的铜板给那母亲。她连声道谢地接过钱去，立即走逃店里买了两只面包让孩子吃，她自己不吃。

“你怎么不吃？”我问那母亲。

“等孩子吃饱了，我再吃。”那母亲安详地回答。

我站在一旁看着他们。只见那孩子三口两口把一只面包吃完了，母亲又把第二只面包分一半给孩子。

“现在你可以吃了！”我关心地说。

那母亲向我点点头，正要吃面包时，孩子的一半又吃完了。看得出孩子真是饿极了，但他哪里知道母亲也饿呢！

“妈妈，我还要吃！”孩子用小手去抢母亲的一半面包。

那母亲只好把面包全让孩子吃了。我心里很不舒服，我有些生气地说：

“你难道不饿吗？为什么都给孩子吃了？”

“孩子要，先生！”那母亲苦笑了笑，眼内闪着泪光。

那母亲的泪光直射进我的心坎，我感到一种母爱的温暖，顿时周身热了起来！这就是伟大母爱的力量，这是世界上任何爱都不能比似的！于是，我不禁向那母亲肃然起敬，我又将衣袋里仅有的二百文铜板给了她，我想说：你也可以作我的母亲吗？但是还没等我开口，她接过钱，道了声“谢谢”就抱着孩子走了。我还以为她又去买面包，谁知她一转身不见了。我迎着风雪边追边找，但是毫无踪影。仿佛风雪呼啸着告诉我：

“你不要呆了！那不是你的母亲，你是没有母亲的人！”

是的，我没有母亲，天下的母亲都不是我的；可我的母亲在哪里呢？我的心冷得颤抖！我惆怅地回到小屋，点上油灯，独自喝了两盅酒，仰卧在床上，看着天花板冥思遐想。刚才的情景，使我模糊地记起了儿时的一幕类似情况，我沉醉醉在遥远的往事回忆里——

大约是十七年前，我四岁的时候，母亲带着我住在湖北舅舅的住所。我因患眼疾，成天哭闹不休。可怜的母亲就成天抱着我，废餐忘寝。这虽然是后来别人告诉我的，（好像是大表姐告诉我的。）但我的脑海还依稀留下些难忘的印象；特别记忆深刻的是，夜晚母亲和舅父、舅母玩麻将牌，我已经睡觉了，她还把我抱在怀里，我常常被他们吵醒；而且灯光亮得使我睁不开眼睛，于是我便

哭闹，母亲便为我唱歌。

母亲，我的母亲又何尝不是也像刚才马路上的那个母亲一样，只知爱护孩子，不顾自己呢？可悲的是，我的母亲还没有把我抚养成人，她就走了，永远地走了；走到渺茫无际的去处了！

一阵绝望的悲哀压倒了我，我伏在枕头上痛哭失声，直至昏昏入睡。

也许是上帝被我感动了，他将我带进一个美妙的梦境；真的，我第一次梦见了母亲，我的年青美丽的母亲！

似乎是在汴梁古城我的寓所里，我正自伏案读书，窗外秋风萧瑟，吹得浑身发冷，我便爬到桌小憩。朦胧中忽然有人轻轻拍拍我的肩，温柔地说道：

“仔细着凉，孩子，上床睡去！”

我吃惊地仰首观望，一个似曾相识的年轻女子站在我的面前；她生得那么标致，神态娴静，风度翩翩。她穿着一身民国初期的服饰，素雅的绸缎衣裙；她亲昵地抚摸着我的头发，拉住我的手，凝视着我。

“孩子，我是你娘回来了！”

“娘，你就是我的娘？！”我惊愕地睁大了眼睛仔细端详她。

母亲微笑地点点头，我立刻扑到母亲的怀里，欢喜得热泪盈眶！

“娘，娘，你可回来了！你到什么地方去了？你让我想得好苦呵！娘！”我紧紧地抱住母亲，像是怕再失去她。

母亲哭了，泪水浸湿了我的颈子。她默默地坐下。我匍匐在她的膝前。

“娘，你怎么不回答我呀？你哭了！娘，娘！”我也哭了。

母亲垂首默默地啜泣，一面只管抚摸着，像有千言万语不知从何说起，又像有难言之隐。过了一会她才抽噎地说：

“孩子，不要问这些。以后忘了我吧，我对不起你，但我也无可奈何；我只有怨命，是命里注定我得病不治，命里注定我们娘俩不能相聚。”

“不，不！我永远忘不了你，我需要你，以后我们再也不要离开了！”我恳求着，带点撒娇的口吻。

“不可能，孩子，我们不是一个世界上的人！我们不可能在一起。”母亲摇摇头，凄然说，“这是命运、命运！你好好地生活吧，不要为我难过，要当心自己，努力上进，你的前途是无量的。”

我听了母亲的话半信半疑，我不大明白她的意思，但我看出她还要走，因此我苦苦地哀求她。我不信什么命运，我以为命运掌握在自己手里，但我没有想到，死神主宰了她。我们相对啜泣，我们的泪溶在一起，许久许久都说不出话来。

蓦地传来远处的鸡叫声，母亲怵然吃了一惊，立刻站起来就向外走。我一把拖住了她的衣襟，坚决不放。

“娘，你不能走，你不能再遗弃我！”我蹶足哀叫着。

“不行，孩子，我必须走，放开我吧，时候不早了！”母亲急切地挣扎，反过来求告我。

“你好狠呵，娘！你就没有一颗慈母的心吗？”我忍不住地抱怨了母亲，一面使劲拉紧她的衣裙。

母亲犹豫了一会，忽然问我：

“孩子，你愿不愿意跟我走？”

我连忙答应地：愿意！我心里想：留不住母亲，就跟她走，反正我不能没有她。这时她从衣袖里取出一条手帕，蒙住了我的眼睛，她说：

“闭上眼睛，现在我要带你到一个地方去，不过那是一个没有太阳、不见光明的地方！”

“就是地狱我也去，只要那里有你！”我毫不思索地说。

我觉得母亲的话是骗人的遁词，世界上怎么会没有太阳，不见光明呢？我暗自好笑，笑她把我当成三岁小儿了！但是此刻蒙上了眼睛，确是眼前一片漆黑。我只好闭上双目，由她牵着我走出去。走呀走的，不知道走了多少路，走得我有些腿软头晕，而内心却是十分愉快。我想像着今后我就不再是没有娘的孩子了，我为这莫大的幸福所陶醉！

记不清过了多长时间，我有点不耐烦了；我喊了一声“娘”，没有回应，我便睁开了眼睛；多么离奇的事呀，手帕不在了，母亲也不见了，面前是一片荒凉的旷野。我不禁怔住了，宛如冷水浇头，利箭刺进心扉！我痛绝地倒在地上。我又起身四处寻觅，大声地呼叫！寂静笼罩太空，黄沙弥漫大地，我的泪眼模糊了……

雄鸡又高唱了，一阵风吹得我打了个寒战，我连忙擦擦眼泪，转身预备回去；才发现我不是在旷野，却睡在自己的床上。这时窗外鱼肚泛白，案头的油灯已经快熄了，我敲敲脑袋，意识到原来是做了一个梦，一个可怕又可悲的荒唐的梦！

说荒唐，其实也不荒唐；说是梦，也不像梦；因为我是真的没有母亲了，我怀念母亲；我幻想有一天母亲会回来，于是我梦见了母亲。但现实是无情的，连梦也不让我做得美满些，梦中还要重复失母的惨痛！

梦醒了，一切依旧；我依旧没有母亲，依旧孤独……

一九三五年十二月二十四日

